

Introduction to Research material of Fumiko Hayashi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27243

林芙美子資料紹介

Introduction to Research material of Fumiko Hayashi

森 英 一

Eiichi MORI

林芙美子の研究に際してまず信頼できる資料は文泉堂出版の『林芙美子全集』全十六巻である。特に、新潮社版全集全二十三巻を底本として新たに付け加えられたこの全集の第十六巻(昭和五十二年四月刊、以下『十六巻』と略称)には今川英子編の充実した「年譜」や詳細な「著書目録」等が付されている。その後の研究は諸作品と共にこれの学恩を受けて大幅に進展してきたといっても過言ではない。よりよい全集をめざして、後に続く者はこれを補訂することが半ば義務といってもよからう。かつて『秋声から芙美子へ』(平成二年十月刊)『林芙美子の形成 その生と表現』(平成四年五月刊)で初期の詩篇等において若干補うことがあった。その後、今川自身や羽矢みずき、野田敦子等の若手研究者によって次々と新たな資料が付け加えられてきた。

以下、若干の資料を紹介するが、向後の研究に資するところがあれば幸いである。最初に、『十六巻』の「年譜」の記述に関する資料の紹介をする。但し、管見の限りでの既紹介分は省く。

- 0 詩「青空」(大正十四年二月二十八日『東京朝日新聞』)
- 1 詩「初夏の空に」(大正十四年五月三十一日『読売新聞』)
- 2 詩「貧乏神」「犬になりたい」(大正十四年七月十八日『マヴォ』)

- 3 詩「十月の海」(大正十五年五月一日『文章倶楽部』十一巻五号)
- 4 エッセイ「秋江先生のお仕事振り」(大正十五年九月一日同右誌十一巻九号)
- 5 エッセイ「秋声先生の創作生活」(大正十五年十月一日同右誌十一巻十号)
- 6 エッセイ「四国文壇の状勢」(昭和二年十二月一日同右誌十二巻十二号)
- 7 エッセイ「辻さんと五十銭」(昭和三年二月一日『文芸公論』二巻二号)
- 8 エッセイ「雲の姿で」(昭和六年八月一日『作品』十六号)
- 9 エッセイ『川』のお祝ひ」(昭和七年十二月一日同右誌三十二号)
- 10 エッセイ「恋の獵人 女流作家の恋嫌ひ」(昭和六年八月二十三日『北國新聞』)
- 11 小説「ルウ・ダゲル」(昭和九年一月一日『若草』十巻一号)
- 12 小説「アパート往来」(昭和十年三月十五日『サンデー毎日』)

第十四卷第十三号

- 13 エッセイ「婦人の国民服」(昭和十六年四月十日『婦人の生活』第一冊 生活社)
- 14 エッセイ「からだを作れ」(昭和十六年四月十日『婦人の生活』第二冊 生活社)
- 15 詩「無題」(昭和二十二年十一月二十四日『北國新聞』)
- 16 小説「古い風新しい風」第二回(昭和二十二年十一月一日『新風』二卷十一号)
- 17 小説「古い風新しい風」第五回(昭和二十三年二月一日『新風』三卷二号)
- 18 対談「わが最愛の恋人」(昭和二十三年八月一日『座談』二卷七号、山田五十鈴と)
- 19 小説「夫婦仲」(昭和二十五年四月一日『小説公園』二号)
- 20 小説「あはれ人妻」(昭和二十五年六月十日〜十一月十五日全一五八回『北國新聞』)

次に、『十六卷』の「著書目録」に関する紹介をする。

21 「河明り」

昭和十四年六月二十二日 普及版 十六年二月十二日 創元社
二五四頁 B 六版

◇河明り 或る日の幻想 雑妓

22 「七つの燈」は、「著書目録」61(以下番号のみ記す)に「昭和十五年十二月十五日 むらさき出版部」とあるが、昭和十六年二月一日に改訂初版が巖松堂書店から奥付を変えたただけで刊行されている。

23 「妻と良人」127は、昭和二十四年三月二十日発行とあるが、二十三年三月二十日付の刊行本も存する。

24 「淪落」95は、昭和二十二年六月二十日発行とあるが、昭和二十三年十一月一付の刊行本も存する。

25 「新淀君」149は、次のような同題の異本も存する。

昭和三十一年七月一日 東洋書房 二二六頁 B 六版

◇新淀君 上田秋成

※解説—平林たい子

26 牧野信一・宇野千代・十一谷義三郎・稲垣足穂・林芙美子・嘉村磯多(現代日本小説大系第四十四卷)

昭和三十五年三月二十日 河出書房

三九三頁 B 六版

◇放浪記

※解説—伊藤整

27 「第二の結婚」213は、昭和三十七年三月十五日付の刊行本も存する。

28 「女の愛情」210は、昭和四十一年八月二十日付の刊行本も存する。

29 『オール読物』第三十八卷第八号(昭和名作総集・創刊六〇号記念) 昭和五十八年七月五日 文芸春秋社

◇幕切れ

解説

先に紹介した1〜20の中で主なものについて解説を加える。
0 「青空」1 「初夏の空に」は、芙美子がまだ無名の折に童話や詩を雑誌社や新聞社に売り歩いた中で、数少ない採用例である。なお、0の全文は小著『林芙美子の形成』に紹介した。

5 「秋声先生の創作生活」は芙美子と秋声の出会いの時期を考証するに際して重要である。従来は大正十三年とされていたが、

これによって大正十五年七月頃と推定される。詳細は小著『秋声から芙美子へ』で論じた。

7 「辻さんと五十銭」は、芙美子が困窮生活を送っている時に辻潤から五十銭と食べ物を買った思い出を紹介する。辻のことは「放浪記」にも描かれている。辻が渡仏するに際して十数人が送る言葉を述べたその中の一篇。

8 「雲の姿で」は、秋声との思い出を紹介している。

9 『川』のお祝ひは、昭和七年十月に井伏鱒二『川』が出版されたが、それへの感想を語ったもの。

10 「恋の獵人 女流作家の恋嫌ひ」は、芙美子を訪問してくる特に若い男性との応対あれこれを紹介しながら、彼らの恋への未熟さを指摘するとともに、彼女の恋愛観を語る。前年、改造社刊行の「放浪記」がベストセラーとなつて注文が増え、この年も流行作家として益々その名が知られるようになったから、この文章に紹介されるような話は存在したのだろう。

11 「ルウ・ダゲエル」はまもなく『散文家の日記』（昭和九年四月刊）に所収された。内容は芙美子が六年から七年にかけて体験した欧州旅行に基づく。貧しい旅行者の（私）が同様の現地人と交遊する話である。なお、掲載誌巻頭のグラビアには他の数人と共に、椅子に背凭れた芙美子の洋装した写真が掲載されている。

12 「アパート往来」は、未亡人の（私）の語りで進行する。（私）は素人下宿を改築してアパートにする。ユウカリ荘と命名されたそのアパートは九部屋全てが満室となる。しかし、住人との淡泊な交際を望んで改築したものの、結局、彼らに振り回されてしまい、挙句はアパート名を最初決定した「福壽アパート」としなかつたことを後悔する。

13 「婦人の国民服」は、役人の手でなく、芸術家や学者、社会人の発案によって婦人の国民服を作るべきだと主張した文章で

ある。その服は美しくなければならぬし、紺と白、黒を基本の色彩として無地か細い模様が特に若い婦人には似合う、長いスカートもよい、と語る。その根底には当時、モンペが男子の国民服に対応するものとみられていたが、芙美子はそれを女性が遠慮がちに着ているようなので、もつと積極的に喜んで着用するものとして女子用の国民服を提案した。因みに、掲載誌は服飾の写真や型紙で三分の一程の紙面を占め、その中に芙美子同様に「女の国防服」の提唱と型紙とが掲載されている。

14 「からだを作れ」は、芙美子の洋服観を述べる。洋服は着心地の良さを尊重して着用するが、小さな体のためにタイトなものを作らないと述べ、着物はその袖の長さや帯の広さに閉口する、もつと体を締め付けないように願うと語る。同時に、着物に負けない体づくりにも留意しなければならないと付け加える。同様の随筆に『心境と風格』（昭和十四年十一月刊）所収の「着物雑考」がある。なお、この号には横光利一「着物と心」宮本百合子「働くために」のエッセイも掲載されている。

15 「無題」は詩。芙美子らしい虚無感が漂う内容である。巻末に（廿二・十一・十九）とあり、金沢の卯辰山に建立された徳田秋声文学碑の除幕式出席のために、広津和郎や川端康成、中山義秀と共に二十二年十一月十七日に金沢を訪問した際に地元紙に依頼されたものと思われる。因みに、この四人のことは翌日の『北國新聞』十一月十八日付で「幸福つかむために」は恋愛も結婚も自由」という見出しで記事が掲載されている。『第十六巻』に（昭和二十二年の十二月に金沢へ赴く）とあるのは訂正する必要がある。

16 「古い風新しい風」は連載第二回目。最初に掲載誌について述べると、同誌は大阪新聞社東京支社が発行した月刊誌で、昭和二十一年一月に創刊号を発行、以後、何時まで発行されたか、不明。国立国会図書館の同誌所蔵は昭和二十一年一月号から十二

月号(但し、二月号欠)と昭和二十三年八月号から二十四年三月号(但し、二十三年十月、十二月号が欠)。日本近代文学館の所蔵は昭和二十一年一月号から九月号(但し、二月、四月、七月号が欠)と二十二年三月号、二十三年二月、六月号である。これらのうち、二十三年六月号以降に「古い風新しい風」は掲載されておらず、二十三年二月号に第五回が掲載されているところから推して、あるいは二十二年十月号に第一回を掲載した後に二十三年五月号までに最長で第八回まで連載して終了あるいは中止したと思われる。第五回冒頭に「前号までの梗概」が掲載されているので、取りあえず紹介する。

○市の女学校教師であつた塩崎秋子と桑重和子は共に同僚の画教師金山登に好意を抱いてゐた。しかし、運命はまず和子を小野嘉隆といふ軍医に嫁がせ、彼女は良人と共にボルネオへ渡つた。数年後、彼女は南美子といふ女兒をまうけたが、母の死によつて單身帰国することになつた。

既に秋子は金山と結婚して朝鮮へ渡つてをり、日に日に悪化する戦争の重圧に耐えるために和子は南美子を連れて女中の故里である信州に疎開した。

ある日、突然金山登が和子を訪れ、秋子は病死した旨を告げた。その夜、おたがいを引きよせる運命の糸にあやつられて二人は抱擁したが、金山は再会を約して、翌朝東京へ帰つていつた：

さて、この第二回は、学期末に東京の代々木の実家に帰省した桑重和子が叔母の紹介で小野嘉隆と見合いをする話。陸軍中將を務めた亡父同様に小野の父は陸軍少將経験の男で、嘉隆の二人の兄も医師、妹も医者に嫁いでいる。ただ、嘉隆は船に乗る医師ということと梗概の軍医というのとは異なる。こちらの方が正しい

のだろう。和子は見合いに乗り気でない。というのも、津田塾を卒えた彼女は見合いは古い形式であり、自分がそれに参加するのは嫌だという考えを持ち、一方、教員室で机を並べる金山に好意を抱き始めているからである。

掲載第一回はおそらく、学校赴任の前後の様子や勤務校での三人の様子が描かれている可能性がある。また、第三、第四回は見合いを断わり切れなかった和子が第二回に紹介されるように結婚と同時にシンガポール経由で南ボルネオに行き、同地で南美子を出産、まもなく母が死去。一方、秋子は金山と結婚、のち二人で朝鮮に渡る。さらに、疎開先の信州で和子と金山とが結ばれるというかなり早い展開で進んだと思われる。

17「古い風新しい風」第五回は、先に見たように冒頭の梗概を受けて展開する。終戦を知った和子はすぐさま東京に戻る。そこへ金山が訪ねてきて二人は出て行くという内容。巻末に(未完)とあるので、小説は第六回以降、和子の夫の安否やそれを確認しないままの金山との関係等々が中心となって進行すると思われる。

18「わが最愛の恋人」は、芙美子と女優山田五十鈴との対談。山田はこの時三十一歳。芙美子より十四歳下。戦前から活躍、特に「祇園の姉妹」(一九三六年)によつて女優として認められていたが、この対談まもなく映画やテレビ、舞台等で活躍し、数々の賞を受賞して女優として最初の文化勲章受章者となった。

対談は「最愛の恋人」、となつているが、この恋人は必ずしも人間に限らない。映画だったり小説だったりする。内容は芙美子の観た映画の感想や俳優についての話、山田が当事者としての映画論や俳優論等、かなり突っ込んだものになっている。途中に織田作之助の未亡人が加わり、話はずむ。それぞれが好きな作家や俳優、理想の役者人生、人づきあいの在り方等本音で語っていて、興味深い。

19「夫婦仲」は、先の『第十六巻』「年表」に作品名の記載がある。しかし、二十五年三月とあるが、正確には同年四月の発行である。この雑誌は二十五年三月から昭和三十三年四月まで発行されたもので、発売元は六興出版社、B5版。吉川英治や獅子文六、川端康成、井上友一郎、大仏次郎、高見順、丹羽文雄等が執筆した。この作品はその後、単行化されていないので以下内容を紹介する。

豊原治五郎は五十歳。大陸で役人をしていたが、終戦一年後に帰国。長男はまだ捕虜生活、二男は三高生、妻は帰国まもなく病没。家屋敷を売り払ってその金で借家住まいをしている。隣家は某大臣の愛人宅。女中に雇った十九歳の民子と肉体関係が生じてからしばらく経ち、亡妻と比較して礼儀作法もろくに知らない女だが、責任を取ってそろそろ入籍でもしなければと考えている。そんな治五郎の心情が隣家の様子と、中国史上の好む皇帝の史実とを重ね合わせながら語られていく。

ある日、民子の親戚という与市青年が訪問してくる。近々に田舎へ帰れという親の話を伝えにきたというのだが、彼女が帰郷した後で実は彼と結婚するという音信が届く。複雑な心境になった治五郎はそれまでの自分の行為を反省し、民子の気持についてもあれこれ忖度する。結局、彼はお祝いに草履を贈る。

治五郎の妻を亡くした寂しさを、隣家の様子や中国史や自身の性格やらを絡ませながら巧みに描いた作品と言えよう。

20「あはれ人妻」は、その内容がすでに明らかである。すなわち、連載終了間もない二十五年十二月十五日に六興出版社より単行本として出版され、後に全集にも収録された。なお、六興出版社は「あはれ人妻」と並行して連載の「浮雲」を完結後に同様に単行化している。これまで書き下ろしとみられていたが、じつは新聞連載を経たことが判明した。おそらく通信社経由の配

信と推測されるから、他の新聞にも同時掲載されていた可能性がある。森田元子による挿絵が付される。また、連載前に次のような「作者の言葉」が掲載された。

新聞小説というものは、その日、その日に興味を持たせるために読まれ、読者の知遇を得なければならぬ。だれにも読まれないものは、失敗の作となり、なかなかそうした作品はむずかしい。久しぶりに、私はまたそうした作品にかんたんを砕かなければならない。やってみるつもりである。消え行く前にかつきの星よ、飽きもせで触れ給えである。

ここにあるように、芙美子にとつて新聞連載は戦後「うず潮」の次に「權花」を『中部日本新聞』に掲載して以来である。なお、連載に当たって（作者の意図により旧仮名づかいを使用）との「お断り」が末尾に附されている。

ところで、新聞連載時のタイトルは「あはれ人妻」。さらに「美しい囚人」「可愛いソフイ」等の小見出しが付されていたが、単行に際して「あはれ、人妻」と変更され、表紙や奥付はそのように記されている。また同時に、小見出しや挿絵が省略された。従って、正しくは「あはれ、人妻」と記すべきであろう。なお、本文は字句と行変えに若干の訂正がある。

翻刻

10「恋の獵人 女流作家の男嫌ひ」

林 芙 美 子

私はよく未知の女のひとから手紙を貰ふが、男の人からも随分貰ひます。一般に読者は、作家だなんていふと、憧れといふか興味といふか、とに角どんな顔をしてゐるだらう、どんな生活をし

てゐるだらうと思つて突然やつて来たりする人があります。手紙位なら構はないが、この突然の来訪には時時私の方がおどろかされるのです。

それも立派な堂々たる大学生なんか訪問されると、男のお客に馴れてゐる私でもテレ臭くなつてしまひます。勿論、そんな人は私が女だといふことに興味を持つて来るらしいです。中にはどこから聞いてきたのか、私の生れや、過去の生活などまで知つてゐて、そんな話を長々として行く人もあります。

『僕はじめて東京へ来た時、病氣しちやつて、下宿のおばさんが介抱してくれたんですよ。そして僕のそばで怪しからん素振りをして僕を誘惑するんです』

はじめて来た大学生が座るなりだしぬけにかうです。私としてもアイタ口がふさがらないぢやありませんか。すると大学生はまた得意になつて続けるんです。

『そのおばさんは年も名も僕の母と同じ人だつたんで、僕を親切にしてくれると母親のように思つて親しんでゐたんですが、それからといふものはもう僕いやんなつちまつて、早速越しちやつたんです』

私を女だと見くびつて、こんな愚にもつかぬ話を持出したのだからか失敬な、と思つても見ましたが、しかしまだこの大学生には純なところがありました。少くとも中年者の荒んだ気持はないのです。

私はきつと文学青年だらうから何か素晴らしい文学の話でもしやうと思つてたんですが、もうそれつきりその大学生が嫌ひになつてしまひました。こんなのが大学生だと思ふと、何のために学校へ行つてゐるのか分らなくなります。

かと思ふとこれはブチ、ブルの息子ですが、この男は大した面構へでもないのに、あらゆる方面の女と交際して、ネクタイとか、絹の靴下とか、煙草錢、コーヒー代などまで女から搾取することを目慢にしてゐる男でした。勿論、かうした種類の男だけに文学のことも一通り知つてゐるし、キネマもスポーツもよく語ります。ところが彼の唇ときた日には、きたなくて二度と見る気がしないのです。といふのは豚の切身みたいな、艶のない実に汚れた唇で、それで平気であるので不快でたまりません。やはり男は一字に引しまつた艶々しい唇の方が魅力があります。

ある日、大学生が訪ねてやつてきました。この大学生はもう何度となくやつて来る人で、

『僕、弱つちやつた。僕の友人に及川道子を知つてゐる奴がゐましてね。そいつが彼女から手紙を貰つたといつて威張つてゐやがるんです。僕もシヤクで仕様がないうで、おれは林芙美子を知つてゐるつていつてやつたんです。ところがその野郎嘘をつけ、ほんとならおれを紹介して見ろ、ていふんで仕方なしに連れてきました。逢つてやつて下さい。』

とこんなことをいつて来るのです。つまり女優とか女性の芸術家のやうなものに知己があるといふことが、かれ等には非常な自慢らしいのです。馬鹿げたことですがまた一面可憐さがないでもありません。

来る人達が皆年若い純真な人達ばかりなら問題ではありませんが、中にはいかゞわしい野心を持つてゐる人も沢山あります。それは私が女だからですが、そんなのにぶつかると、時のはづみで私も悪戯氣を起して見ますが、すぐふきだして茶化してしまひます。

『まあ、この男、なんてヘタクソな口説き振だらう』

と思ふやうな男が飛び出してきます。恋をする資格のない男だと思へば、憐にも思はれてきませんが、しかしそこには男性といふ特殊な魅惑は少しも感じられません。まだぶしつけな学生の方がましです。

マルキシストだといはれてゐるある人とある時散歩しましたが、その時

『僕と少し浮気して見ない？』

といひ寄られた時、私はかねてその人を大変尊敬してゐただけにがつかりしてしまひました。ブルジョアのひ々爺がいふのと同じです。どの男も女と見ればすぐこれだと思ふと、男を友人に持つことの六かしさ、辛さが身にしみます。

(原文は旧漢字、総ルビ、一行十五字)

15(「無題」)

林 芙美子

考える事はなにもない
だが何かがある心の重さ

人生とは何だろう

わかりっこはないのだ

ただわかつたような

顔をしているだけだ

二

百年も私は生きたい

だがいつ死んでもいい気もある

だが死ねるものか

この面白い虚実の上に

私はただ流されてゆく……

それでよいではありませんか

——ああ金沢は雨なり

(廿一・十一・十九)

16「連載小説第二回 古い風新しい風」

林 芙美子 佐藤美代子画

久しぶりに見る東京は、二人の若い女教師には何となく活動的な、愉しいものを感じさせた。闘争があり、虚栄があり、名譽があり、田舎の保守的な空気のなかに、退屈しきつてゐた二人には、この曖昧でない都会のきびしい空気が好ましかつた。——塩崎秋子は築地に住んでゐた。桑重和子は代々木。二人は東京駅でそれぞれに別れた。

代々木の練兵所近くの、ひっそりした邸町のなかの小さい門がまえの家。和子は、母親と、慶応の医科へ行ってゐる弟との三人暮し。久々で戻つてみると、田舎へ赴任して行つた時と少しも変わらない平凡な家の中も、何となく珍らしく、玄閑へはいつて、靴をぬぎながら、和子は、出迎へてゐる母に、

「東京を離れてみると、東京つて、とてもいゝところだつて判つたわ。活々してゐるンですものね」と、云つた。

部屋へはいると、床の間には大輪の菊が活けてあり、障子ぎはの古びたピアノもそのまゝ。どこかへ二三日旅行をしてゐたやうな、森閑としたたゞづまひ。

「佑ちゃんは？」

「あゝ、今日は、早稲田の住谷さんのおばさんのところへ出掛けで行つたのよ。あなたの電報が来てるンだから、早く戻つて来るでせう……」

「仏蘭西語、だいぼうまくなつたかしら？」

「さア、何だかねえ……。一人で、ヌウザボンブウザベエなんて云つてますよ」

茶の間の炬燵の中にかけてあつた、和子の普段着を母が持つて来てくれた。洋服をぬいで、あたゝかい着物に着替えると、ふつと、母は思ひ出したやうに云つた。

「住谷さんて云へばね。住谷さんのおばさんが、和子にどうだらうつて、縁談を一つ持ちこんでいらつして、学季末に戻つて来たら、一寸、先方の方に逢つて貰へないかつて話なんだよ。——先方はお医者さんでね。来年の春には、ボルネオへいらつしやるんださうだけどね。N植産つて、南洋ゴムをやつてゐる会社があるんださうけど、その会社のお医者さんで赴任して行きなされるんだつて、私も、そんな、ボルネオなんて、遠い所へ行くひとに、和子さんをやるのは可哀想だと思ふんだけど、住谷さんのおばさんは、向ふの方が、和子の写真を見て、ぜひ見合ひをさせてくれつておつしやるので、逢はせるだけいゝから何とかしてくれつて云ふのよ。あのおばさんの事だから、一人ぎめに、えゝこの娘は、私の心持一つでどうにでもなりますなつて云つて、引つこみがつかなくなつたんぢやないかね——。向ふさまは、二十八で、慶応出の方でね。まだ、御両親があつて、御兄弟も六人だそうでね。とても、うちの和子は、我まゝだから、そんな大家族さまのところへ行けやしませんからつて断つただけど、住谷さんきかないのよ」

和子は炬燵にもぐりこむと、座蒲団を枕にして、男の子のやうに、あふむけに寝転びながら、気持ちよさそうに天井を見た。旅がへりのせいとか、この見合ひの話は、一種の反響があつた。どんな男かは知らないけれども、和子は、ボルネオと云ふところに心が誘はれた。暑い国に行つてのびのびと暮す事も悪くはないけれども、只、相手の職業が、医者だと云ふ事に何となくこたわる。

「だつて、お母さん、私、学校へ勤めたばかりで、いくらもしないで止めるつてこと出来ないわ。——それに、まだ、私、そんな結婚なんて考へてゐませんもの……」

「えゝそりやアさうよ。でも、こんな話もあつたつて、あなたの耳に入れとくのよ。どうせ、佑ちやんが、今日、あなたの帰へつて来る事を報告してゐるに違ひないから、そのうちせつせとやつて来ますよ。だから、一応は、あなたの耳に入れておかないとね」

母は熱いリプトンの紅茶を淹れて炬燵の板の上に置いた。和子はむつくりと起きあがると、熱い紅茶をしみじみと味つた。結婚と云ふ事は一度も考へた事はなかつた。不意にそんな話を持ちかけられると、和子は急に、自分のやうな女にもそんな話があるのかとくすぐつたい思ひでもある。母が小筆筒のひきだしから、ボルネオへ行く医者写真を出して来た。和子はノートでもめくるやうに、その写真を取つて厚い紙表紙を開いてみた。一家族の記念写真とみえて、白髪の老人が真中で、その夫人らしい老女が左側に腰をかけてゐる。その二人をかこんで、若い男や女が、一応の正装をこらして立つてゐる。

「一番右のはじの黒い背広を着てゐるのがさうですよ……」

なるほど、相当の紳士である。背は五尺五六寸はありさうだ。三男だとかで、上の兄二人はみなそれぞれ妻君と並んで正面に立つてゐる。妹が三人、弟が一人。妹は小さいのが女学校四年位であらうか。瘦せがただけれどもきりようはなかなかない。子供達のみな、両親のおもかげを過不足なく頂戴してゐる。

「ね、一寸、いゝひとぢやないの？」

「母ものぞきこんで来た。」

眉が太く唇はたくましいが、眼が小さい。それが一寸気にくはない感じだつた。胸のポケットに白いハンカチがのぞいてゐる。両の手は小さい妹の肩にかけてゐる。

かうした見合の写真をみせられると、和子は、いまゝでに男の友人もなく、恋らしい気持ちもなくすこした、聖教徒のやうな生活が、うすうすと淋しい感じだった。

その夜。――

はたして、佑三の報告を聞いたとみえて佑三につれそふやうにして、住谷さんのおばさんが尋づねて来た。

「まア、お帰へんさい。田舎で呑気だったと見えて少々ふとつたンぢやありませんか？ 若い英語の先生どうです？ ○つてところは、お魚のうまいところでせう？ 私、一度、うちのお父さんと、あそこから多度津つてところへ船で行つた事があるわ」

だるまさんのやうに肥えた住谷さんのおばさんは、火鉢を引きよせて、朝日を吸ひながら、縁談の話始めた。

「あさつてが日曜日だから、どう、美味しいものでも食べるつもりで、一度そのひとに会つて頂戴よ。とてもさつぱりしたいゝ方。南洋をみておくのも悪くないぢやないの？。四月に、シンガポールに行つて、そこで十日ほどして船で、南ボルネオへ行くンですつて。とてもいゝところらしわ。――御飯を食べる所は、私、麻布の興津庵はどうかと思ふの。井上薫公のコックだった人がやつてる店で、茶料理だけど、こゝのぎよはんつてえのがとても美味しいのよ。ねえ、はいつておつしやい、はいつて……、厭なつたらおことはりすればいゝのよ。御両親も乗気なから……、お父様は陸軍少将までいつた方で、いまはもうお引きになつて、悠々としていらつしやるのよ。上の兄さんが、麹町で眼科のお医者様だし、次のが、内科で、これはいま慶応の病院勤めでいらつしやるのよ。すぐの妹さんはやつぱり私がお仲人で、一ヶ月程度に結婚なすつたばかり。旦那さまは郵船の船に乗つてるお医者様で、二三日前にマルセイユへおたちになつたのよ」

住谷夫人は、和子の亡くなつた父の末妹で、夫人の良人は住谷

一夫と云つて、A新聞社の論説部にゐた。

無理矢理のかたちで、見合を引きうけたものゝ、和子は何だか始めての事で不安で仕方がない。

「私みたいな、男みたいな乱暴者、お会ひになつたら、すぐ興が覚めちまふわ。おばさんだつてがつかりよ」

「いゝえ、女つてものは、御亭主が生まれれば、ちゃんとならさうがそなはつて来るものです。老嬢にならないうちが花なのよ。何つて云つても、結婚しなければ、男も女も一人前の人間にはなれないんだから……」

切角赴任して行つた学校を、結婚すると云ふ理由で、止してしまふのも残念な気がした。せめて、三月の学期変りを済ませてなればいゝのだけれども、もし、万一、約束が出来たとすると、一月中に吉日を選んで式をしたいと云ふおばさんの意向でもある。しかも、遠いところに旅立つてゆくので、ごたごたした嫁入道具も不用だし、式は、向ふがクリスチャンなので、さつぱりと洋服にして、教会で簡短に済ませたいと云ふ事であつた。

さうした思ひやりのある話になると、母親の方が大の乗気で、もう、まるで約束がきまつたかのやうなこうふんの仕方であつた。それに、向ふではもう、或る程度、桑重の家を調べてゐる様子だつたし、和子の亡父とは、久留米の頃知りあひであつたと云ふ事も、向ふの気持ちがあつた理由であつたのださうだ。和子の父は陸軍中将で、久留米や熊本に長らく住んでゐた。いづれも恩給暮しと云ふ事も、向ふには信用があつたのに違ひない。

十一時頃、おばさんは、ハイヤアを頼んで貰つて自動車で早稲田へ戻つて行つた。和子は風呂がたつてゐたので、佑三のはいつたあとと、一人で、久しぶりに吾家の鉄砲風呂へはいつた。

いまゝで気にもとめなかつた自分の裸体を眺めまはしてみる。別に、おばさんの云ふほどつたとは思はないけれども、腰の

まるみが大きい感じだった。胸も程よく張りがあり、田舎の海辺で規則正しい生活だったせいとか、すくすくとした姿体が、自分でも美しいと思へた。

相手の写真に対して、不快な感情もなかつたけれども、見合ひをするに云ふ事が、和子には古めかしい気持ちだった。まるで馬か牛をばくろうが売りつけるやうな品さだめの出合ひの場面が、勝気な和子にはしやくぜんとしない。思ひきつて断ればよかつたとも思つた。

日曜日。早稲田から、女中が使ひに来て、四時に、麻布へ出向いてくれるやうにと云つて来た。服装は着物でない方がいゝ。なるべくお洋服を着ていらつしやいと云ふ伝言である。

気持が浮いてみたり、沈んでみたり、和子は妙に落ちつかない。それでも、やつと興津庵に母と二人でかけつけたのは五時一寸前であつた。もう先方は来て待つてゐた。男の名前は小野嘉隆と云つた。写真よりは幾分老けてみえた。ちやんと写真の両親もつきそつて来てゐる。

部屋には香が焚きしめてあり、手桶型の黒塗の火鉢には、青い炎をたてるほど、炭火がこつこつと熾つてゐた。

世馴れた住谷のおばさんが、すぐ話の糸口をつけてくれる。

熊本のひこしやん団子の話から、九州各地の名物に話が及び、陸軍大学の何期生の誰それはどうしておられるとか、和子には何のかゝわりもない話題から始つた。料理も半ばごろになつて、今度は嘉隆が南方の話を始めだした。ぽつりぽつりとした話しぶりで、雄弁ではないが、その話しぶりは誰にも好感を持たれる。如何にも船医らしい、各地の風変りな話題を持つてゐる。

何処と云つて難の打ちどころはないのだけれど、このひとは、ひどい心の痛手を持つてゐるのではないかと思へるやうな時々、

話のつきたときに空をみつめる妙な隙間が感じられた。

「和子さまは、津田の英学塾をお出になつたのださうでございませぬ。——私の姪もあそこの卒業生ですが、なかなか健実な学校でございませぬ」

自分の学校を讃められて悪い気はしない。

しかも、見合ひの相手の母親から讃められると、さつき感じた、薄々とした、男の心の隙間のあるなしも、風に吹かれて行つてしまふ。

この見合ひは、一応はせいこうしたものと云つていゝほど、食事が済んで、自動車で戻る時も、仄々としたなごやかさがたゞよふてゐた。助手台に乗つた嘉隆の、刈りあげた首筋も清潔さうだつたし、耳もたつぷりしてゐた。和子は耳の小さい男は好かなかつた。老海色に灰色の細かい杉あや織りの背広に、燈の下で見た、黄灰色のネクタイも厭味ではない。だけど、父親似で、眼の小さいのが一寸気に食はない。心の窓である眼の小ささが、和子には気にかゝつてゐたし、心の狭さを感じられてもくる。嘉隆の父は、軍隊で号令をかけ馴れた人らしく、小さい眼でちいつと人を正面から見すえる凄味がある。

非常に単純素朴な眼だ。悪気のない眼だけれども、何となく見すえられる事は息苦しい。

嘉隆の母と、和子の母と、住谷のおばさんは後の自動車。どうせ、年をとつた女三人の話す事だから、お互ひにそれぞれ腹の中をさぐりあふやうな、おせじの馴れ合ひのやうなさゞめきになつてゐるに違ひない。

和子は、嘉隆の父と並んで腰をかけてゐた。バックミラーにうつる嘉隆の広い額が小さい鏡の中でぼつと浮き立つてみえる。

その夜、和子は、寢床へはいつてからも仲々寝つかれなかつた。

結婚を、いまあはてゝする気もなかつたし、と云つて、自分の若さのうちで、度々、縁談を持ちこんで貰えると云ふチャンスもさうざらにありやう筈はない。和子は、何の関連もなく、〇市の女学校の教員室の風景を心に浮かべてゐた。和子と並んだ席に、金山登と云ふ絵の教師がゐた。美校を出て二年目に、胸を病んで、田舎の女学校に赴任して来てゐる。デリケートな感情の持主であつた。上級の生徒からも、思慕をよせられてゐると云ふ風評があつた。淡々として、どのやうな話題にも巻き込まれないだけの用心をかまえてはゐたが、人柄のさせるわざなのか、風貌から来る好意なのか、ニツクネームも、悪いものではない。ニツクネームはハイネ。ドイツの感傷詩人の名を持つて来るころ、妙を得てゐるほど、何となく、そんな爽涼とした雰囲気を持つた男であつた。またのニツクネームはハイカアと云ふのもある。

東京生れで、浅草の松葉町に家があるのだと云ふ事を和子は聞いてゐた。金山は、和子達より、一足さきに東京に戻つて来てゐる筈である。東京生れの、和子と、塩崎秋子と、金山登とは何となく、まがあつた。時々、教員室に居残つて話しあふ時もある。和子は、金山の虚心なこだはらない風格が好きであつた。しかも、旅空の始めての赴任地で知つた、最初の男の友人であるだけに、その淡い交情のなかには、和子の根深い心の底に、油断のないほのめきもひそんでゐる。

金山の事を考へてゐると、急に嘉隆と見合ひをした事が馬鹿々々しく思へた。最も近代的な教育を受けて、満身ほこりに満ちてゐる若い女性が、おめおめと見合ひと云ふものをさせられて、何の心のほのめきもない男と同棲すると云ふ事は、考へてみるとあまりに古風でありすぎる気もしてくる。

和子は、翌朝、食事の前に、新聞を読みながら、

「お母さん、私、小野さんの話、何だか厭な気がして来たのよ。

昨夜、見合ひなにかしなかつたらよかつたと思つたわ。——あのひと、とても眼の小さいひとね。こまかい人ぢやないかしら……まだ一二年は、田舎の先生をしてゐる方が丁度いゝのよ」と、云つた。

「小野さんの方ぢや、とてもいゝ縁だつておつしやつて、自動車の中でも、そりやア、小野さんのお母さん、ご満足で、ま、長くご交際をしておつしやつた位だよ。——和子がべちやべちやしてないところが気に入つたんだつて。体も壮健さうで安心だけれど、一度、お互ひの健康診断書はおみせしあひませうつてね。只、和子が眼を細くする時があるんで、近眼なんだらうかつてご心配だつたんで、いゝえ軽いんですのよと申しあげておいたんだけど……向ふぢやア、とても気に入らなうだよ」

「自分の眼の事は棚にあげてるわ。厭だなア、見合ひ結婚なんて……」

「おつきあいしてみても、気持がむいたら、お互ひ好きになれるやうな方ぢやないかね？」

「さうとばかりは思へないわ。私、貧乏でもいゝから、もつと、はつらつとした、ファイトのある人がいゝわ」

味噌汁をすゝつてゐた佑三が、にやつと笑つて云つた。

「生意気云つてるよ。いまの時代にファイトなんか持つてるのは、僕達位の年齢しかないぜ」

「あら、しよつてるわ。年齢の問題ぢやないことよ。大いに環境の問題があると思ふの。第一、私、医者つて性に合はない」

「手きびしいなア」

「君も医者だつたわね」

「へい、佐様でございます……」

姉弟はくすくす笑ひあつた。

和子は食事が済むと、築地に秋子を尋づねて行かうと思つた。

久しぶりに銀座へ出てみるのも悪くはない。秋子をさそつて、暮の巷を歩くのも魅力がある。そして、気がむいたら西洋映画の一つも見て、末広でビフテキの血のしたゝるのを食べて、資生堂で、生クリームのはいつたスベツシャルコーヒイでも飲みたい。

和子は外套を引つけて、戸外へ出た。もう散りかけたさぐんかの花が、処々の植込みにちらほらしてゐる。昨夜は霜がひどかつたとみえて、霜どけの道がぐちやぐちやしてゐるなかを、昨夜、家まで送つて貰つた自動車のわだちが深くえぐれて残つてゐた。

この世にあるは名のみか

こゝろの世のうすき煙よ

この世にあるは恋のくるしさ

なにもものもくるしさにとゞめおくのみ

切なさ 侘しさの底のみを見て

ほどよきなくさめにとゞまるこゝろ。

和子は、秋子がこんな詩をつくつたのよと云つて見せてくれたのを思ひ出してゐた。くつきりと、土に残つたわだちの跡の痛々しさが心に来る。

築地の終点で降りて、本願寺の裏側になる秋子の家。紺ののれんをさげた、塩崎海苔店と染めた文字がくつきりとしてゐる。

横へまはつて、内玄関から遣入つて行くとピアノの音がしてゐた。女中がすぐ二階へ上つて行つた。ピアノの音はとまつて、紅いジャケットを着た秋子が降りて来た。

「まア、よく来たわねえ。今日あたり、私、代々木へ行くつもりだつたのよ」

「ピアノ、あんただらう？」

「うん。もう退屈しちやつてるのよ」

「早いね」

二階へ上つて行くと、案外、晴々とした八畳の部屋。数寄屋風

なめんかは柱のつくり、京壁の落ちついた色。代々木の家とはまきり違ふ。恩給生活者の軍人好みの武骨な家とは違つて、如何にも東京の下町らしいなまめかしさ。一間床に、緋おどしのよろいが一つ飾つてある。

壁ぎはのピアノにはレースがかゝり、人形や、薔薇の花が華々しい。

「豪洒なもんだね」

「いやなほめかたぢわ……」

「いや、全くのところがさ……」

「皮肉ね」

「一人娘は違ふよ。——羨ましいな」

「馬鹿にけんのんね。ぷりぷりしてるの」

「うん」

「怒る事あつたの？」

「あつたのさ……」

「何が？」

和子はチェリーを出して口に啜えた。昨夜の見合の席では、煙草も吸はなかつた。それほど、保守的に、その雰囲気になれあひを示してゐた自分のものほし気なこゝろもちに私にはやりきれなくなつてゐる。

「見合つてもはやつたのさ……」

「へえあんたが？」

秋子はくすりと笑つた。和子はマツチをすつて一服つけると、如何にも美味さうに吸つて、あゝと溜息をついて、縁側の椅子に背を凭れさせた。

「へえ、あんたが見合したの？ 誰なの？ 向ふのひと、気に入つたの？」

「気に入らないのよ」

「それでむくれてシの」
「馬鹿だねえ……」
和子は無性に淋しくなつて、煙草の烟をみつめてゐる。

(未完)
(原文は旧漢字、一行十九字、四段組み、挿画二葉)